



【感染症だより】

～おたふくかぜ（流行性耳下腺炎、ムンプス：Mumps）～

おたふくかぜは、大流行はしていないけれど、保育園などでだらだらと流行しています。感染経路は、咳やくしゃみに含まれるウイルスを吸い込むことによる飛沫感染^{ひまつ}や、ウイルスが付着した手で口や鼻に触ってうつる接触感染^{じかせん}があります。2～3週間の潜伏期を経て発症し、片側または両側のだ液腺（だ液をつくる場所：耳下腺が最も多い）が腫れます。39℃以上の高熱を出すこともあり、痛みで食事が摂れなくなることもあります。ムンプスウイルスが感染しても無症状に終わる不顕性感染^{ふけんせいかんせん}が3分の1に認められます。発病すると通常1-2週間で軽快しますが、時に髄膜炎^{まいまくえん}を起こすことがあります。髄膜炎になると、頭痛、嘔気^{おうき}で食事が摂れなくなります。おたふくかぜには特効薬がないので、解熱鎮痛剤や制吐剤で対症療法を行い、自然に治るのを待ちます。学校保健安全法により、腫れが出現した後5日間、かつ全身状態が良好になるまで出席停止と定められています。

髄膜炎のほかにも、肺炎や、思春期以降に精巣炎・卵巣炎を合併することがあります。ほか、2万人に一人、稀ではありますが難聴^{なんてい}を合併することがあり、永続的な障害となります。予防接種は任意接種となっていますが、1歳時に1回目、4～5歳時に2回目を接種すると良いでしょう。

おたふくかぜかなと思っても、違うウイルスによって耳下腺が腫れることがあります。また、反復性耳下腺炎^{はんぷくせいじかせん}といって、おたふくウイルスに感染せずに繰り返し耳下腺が腫れることがあります。はっきりとした原因は不明ですが、先天性異常、だ液停滞、アレルギー、ウイルス、内分泌などが考えられています。1年に1～5回耳下腺の腫れを繰り返すこともあります。その場合は「おたふくかぜ」として毎回出席停止になってしまうことを回避するため、血液検査で抗体検査をしておくとい良いでしょう。抗体価が低ければ、おたふくかぜワクチンを接種することをお勧めします。耳下腺炎が起きても、抗体価がすでに上昇していれば「おたふくかぜ」ではなく「反復性耳下腺炎」として扱い、出席停止にはなりません。

文責： 清水マリ子

表：3月しみず小児科・内科クリニックで診断された流行性の感染症

	感染症	患者数
1	胃腸炎	58
1	インフルエンザA	58
3	インフルエンザB	30
4	溶連菌	19
5	水痘	11
6	おたふくかぜ	5
7	肺炎	1
8	突発性発疹	1

★病児保育室あんずからのお知らせ★

この4月から保育室の利用枠が4から6名へ拡大しました。新年度ご利用の際は、申込用紙のほかに、再度登録書が必要となります。お手数ですが、昨年度ご利用いただいた方もご記入をお願い致します。当日来室時でも大丈夫です。

